事例で深める！

学習評価

実践校の取り組みを基に、
学習評価をより充実させるポイントを
田村先生がアドバイス

岐阜県立中津高校

より安心して学べる学校を目指し、単元テストと多様な評価方法を導入

アドバイザー

文部科学省 初等中等教育局
主任視学官
田村 学 たむら・まなぶ

専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官、國學院大學教授などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

生徒の学力の実態に合わなくなった定期考査を廃止

田村　貴校は定期考査を廃止し、単元テストを導入したと伺いました。

西尾　2023年度に中間考査を廃止して単元テストを導入し、24年度に期末考査も廃止しました。そのようにした背景には、ここ数年定員割れが続き、生徒の学力の多層化が進んだことがあります。定期考査の欠点者が以前よりも多くなり、転退学する生徒も少なくありませんでした。その状況を変えようと、当時の校長と各分掌の主任が議論した結果、生徒がより安心して学べる学校にするための方策の1つとして、定期考査を廃止することにしました。

田村　定期考査が単に学力を測るだけのもので、生徒の学習改善に資するものになっていなかったため、評価方法を見直したのですね。単元テストは生徒がより安心して学べる学校づくりにどのように寄与していますか。

西尾　単元テストは各単元の基礎・基本を確認するものと位置づけ、授業内で行っています。出題範囲は直近3～4週間分の授業の内容とし、生徒は20分程度で取り組みます。学習したことが身についているかをすぐに確認できる安心感に加え、定期考査に比べて出題範囲が狭い単元テストは高得点が取りやすいことが、生徒にとって学習に対する自信にもつながっています（**図1**）。

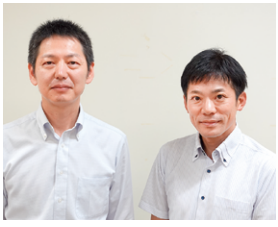
田村　短いスパンで行う単元テストに切り換えたことで、生徒が学びへの手応えを感じる機会が増え、学習意欲を高めていることがうかがえます。教師にはどのような変化がありましたか。

西山　定期考査よりも出題範囲が狭まったため、教師は授業や作問の際に、以前よりも学習目標を意識するようになりました。評価をする頻度が高くなった分、自身の日々の指導内容を振り返る機会も増えました。

田村　生徒の視点に立った学習評価の改善が、学びと指導それぞれによい影響をもたらしていますね。

岐阜県立中津高校プロフィール

設立　1906（明治39）年
形態　全日制・定時制／普通科／共学
生徒数（全日制）　1学年約200人
2024年度卒業生進路実績（全日制）
国公立大は、北海道大、東京海洋大、東京学芸大、富山大、金沢大、福井大、信州大、岐阜大、愛知教育大、三重大、広島大などに48人が合格。私立大は、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ229人が合格。



左から／西尾 豊（教務主任、理科［物理］）、西山敏伸（としのぶ）（進路指導主事、英語科）

評価方法の多様化が、生徒の進路実現を支援する

西山　大学入試に対応するテストとしては模擬試験を活用しています。生徒の成績は良好で、単元テストを導入して評価方法を改善した成果が表れていると感じています。ただ、単元テストの実施日が複数の教科・科目で集中する期間が生じている点が課題です（**図2課題1**）。

田村　単元テストの実施が平準化されれば、生徒は日常的に学習に取り組めます。その意義を改めて学校全体で共有するとよいのではないでしょうか。より安心して学べる学校づくりにおける単元テストの価値を再認識することが、教師が授業の学習目標をより意識する機会になるはずです。

西尾　生徒が見通しを持って安心して学べるよう、授業の進度が遅れた時にはその要因を分析し、改善に向けて検討していきます。

西山　評価方法にも課題があります。ペーパーテスト中心から多様な方法を用いた評価に転換しようとレポート課題を導入しましたが、試行錯誤の段階です（**図2課題2**）。

田村　レポート課題だけでなく、プレゼンテーションや実技など、教科・科目の特性に応じた評価方法を幅広く検討してみてください。単元テストも必ずペーパーテストでなくてはならないということはなく、学習目標に応じて発表や論文の作成なども取り入れましょう。発表や論文などは総合型選抜などで課されるため、生徒の希望進路の実現にもつながります。単元テストの取り組みの成果が模擬試験の結果に表れているということですから、単元テストを含む学習評価全体の設計を、総合型選抜への対応も視野に入れて見直すという方針であれば、先生方の納得感も高まるのではないでしょうか。

西尾　本日整理することができた単元テストの意義や価値を、生徒を含めて校内で共有し、生徒の学びにおいて大切なことを意識して改善策を議論していきたいと思います。

図1　教師が感じている単元テストを導入してよかった点

生徒にとって	• 定期考査に比べて出題範囲が狭いため、学習に取り組みやすい。 • 授業で学習したことが身についているかどうかをすぐに確認できるため、安心感が持てる。 • 毎週、いずれかの教科・科目で単元テストが実施されるため、学習が習慣化する。 • テスト期間がないため、課外活動などを停滞させずに済む。
教師にとって	• 出題範囲が狭いため、学習目標を明確かつ端的に示すことができ、教師も生徒も学習目標をより意識して授業に臨める。 • 自身の指導の成果・課題や生徒の理解度・つまずきをすぐに把握できるため、指導改善を短いスパンで図ることができる。

図2　単元テストを運用する上での課題と田村先生からのアドバイス

課題1　単元テストの実施は各教科・科目に委ねているため、教科・科目によって単元テストの実施回数が異なったり、複数教科・科目の単元テストの実施が特定の日に集中したりしています。

田村先生からのアドバイス

単元テストの実施回数は、全教科・科目で統一する必要はありませんが、極端に異なると、生徒は不公平さを感じるかもしれません。教科・科目間で回数を同程度にしたり、回数が異なる理由を生徒に説明したりするとよいでしょう。また、単元テストの実施が特定の日に集中することについては、各教科・科目の年間指導計画を基に、単元テストの実施日を集約して事前に調整することで、特定の日への集中を解消する方法が考えられます。定期考査を廃止して単元テストを導入した目的は、生徒がテスト期間だけ学習する状況を解消し、日常的に学習する習慣をつけることにあります。授業の進度の調整は難しいかもしれませんが、その目的を折に触れて教師間で確認し、指導計画に沿って授業を進めるという意識を高めていくとよいでしょう。

課題2　全教科・科目でレポート課題を評価材料にしましたが、多くの教師がまだ実践経験が浅く、試行錯誤が続いています。

田村先生からのアドバイス

ペーパーテスト以外の評価方法を取り入れることは、生徒の資質・能力を多面的に見取るという点でとても重要です。それ故、レポート課題だけにとらわれる必要はなく、プレゼンテーションや実技など、教科・科目の特性に応じた評価方法を検討してみてください。評価方法が多様になれば、生徒が発揮する資質・能力も多様になり、例えば、「Aさんは知識の習得は苦手だけれども、発表は得意だな。その資質・能力を伸ばせば総合型選抜で合格できるかも」といった可能性も見いだせます。また、教師は生徒の変容に気づきやすくなり、職員室などで「あの生徒はこう変わったね」といった前向きな話題が増えます。そうした明るい雰囲気が生まれることも、生徒がより安心して学べる学校づくりにつながるでしょう。

※図1・2とも、取材を基に編集部で作成。